

## 昭和40年の年頭にあって

土木学会第五十二代会長 福 田 武 雄



いまや年代は昭和 39 年から昭和 40 年に移った。考えて見ると、およそ“年”というものは、地球が太陽のまわりを一周する時間であって、無限の過去から無限の未来まで絶えることなく続く時の流れの一こまに過ぎず、年代がかわったからと

いっても、物理的にはなんら特別の意味もない。しかしわれわれが、年代がかわるたびに、過ぎた1年の間のできごとを回顧し、迎えようとする未来にたいして新しい期待と希望をもち、これにたいする努力を決意することは、唯物論的には無意味であっても、われわれの生活態度としてきわめて有意義のことと思われる。ゴルフにたとえれば、ハーランド、またはワンラッドが終るたびにスコアカードを眺め、そのうちの成功と失敗のあとを顧みて、新しいランドにおける良いスコアを期待するのと同様である。

それにしても、われわれの祖先が、年のかわり目を冬季に選んだことは当を得たものである。前述のように、“年”が地球が太陽を一周する周期に過ぎないのであるから、理論的には、その原点、すなわち新年元旦をいつに定めてもよいわけである。現在の八月ごろの夏季に定めてもよいわけである。これが冬季に定められたということは、われわれの祖先は、農耕や牧畜によって生命を維持しており、春・夏・秋にかけて休むことなく続けなければならぬ農耕や牧畜などの作業が一段落し、動物類の中には冬眠に入るものもある冬期、また、日出時刻が最もおそくなるような時期を年のかわり目と考えたためであろう。このことは南半球ではもちろん逆になるが、人類の文化の主流が北半球において進展したことを考えればよい。

ここで問題になるのは“年”と“年度”との問題である。わが国では4月1日から新しい年度に入ること定められている。どうしてこのように定められたか知らないが、この年度制は、欠点こそ多々あり、利点はほとんど

どなく、きわめて不合理な制度といえる。たとえば、昭和何年の統計といっても、それがその年の1月1日からの1年間のものか、4月1日からつぎの年の3月31日までのものか、はっきりしない場合が多い。特にわれわれの土木工事について考えると、現在の年度制では、その年度の工事の実施予算額や配分がきまり、実施計画が確定するのは早くも6月ごろになり、それから実際に工事がはじまるのは早くも7月ごろ、ややもすると9月、10月ごろになる。このような状態では、日照時間が長く、気象的にも工事施工に適している4～7月ごろにはほとんど仕事ができず、特に9月ごろに工事がはじまるとすると、寒冷地や積雪の多い地方では、工事可能期間がきわめて短いものになってしまう。このことは農業方面において特に問題になっている。一般に作物の播種や植付けは、4～6月の春季に実施する必要があり、この時期に、これにたいするその年度の実施予算や実施方針が未定であるということは、あらゆる面において不都合を生じている。また、学生諸君にとっても、2月に入ると卒業試験や学年試験が始まるとすると、せっかくの正月も楽しくのん気に過せないであろう。これら不都合な点は、4月1日からの年度制を廃して1月1日からの歴年制にすれば、すべて一掃されるであろう。特に土木事業の面においては、2月ごろにその年の予算や計画が確定し、3月か4月ごろから実際に工事が始められれば、寒冷地のみならず国内どこでも、ゆっくりと十分な工事ができるのではないかと思われる。以上のような観点から、筆者は、現在のような不合理な年度制が、わが国においてどうして存続しているのかと不思議に思うものである。

ともあれ昭和 39 年は、あらゆる面において、わが国の土木事業と土木技術が一大進展を示した年である。わが土木学会も、創立 50 周年のマークを経過した。昭和 40 年を迎えて、わが国の土木事業、および土木技術がますます進展することであろうことを信じ、わが土木学会も、これに対応して、その目的と責務を果たし、学会がますます発展することを祈るものである。